

# Sky Seminar

関西学院大学 スカイセミナー

学内での講義内容を分かりやすくアレンジしたものです。

情報人類学



## IT革命は 世界一様ではない。 それぞれの社会で進む 異なった情報化

青空を自由に飛ぶことは人類の長年の夢であった。また、国を越えて地球がひとつになることも人々の永遠の願いである。この二つが二十世紀の後半、実現に大きく近づいた。

一九七〇年代にジャンボジェットが登場し、特定の職業や階層にかぎらない多くの人々が航空機で世界を旅するようになった。飛つたその目に地球の裏側にまで移動すれば、誰でも地球は狭くなったと感じただろう。

八〇年代には、衛星放送が世界をネットワークし、地球上のどこで起こった出来事も、瞬時に全世界の家庭にテレビ放送され

ネットや衛星放送によってハリウッド映画や米産ポップスはばかりが流入することに、強く警戒している。米国のいうグローバルスタンダードが、世界からみればアメリカン・スタンダードというのでは「ひとつになった地球」もあまり楽しくはないだろう。

IT革命は世界を「様」に変えてしまうのだろうか。

米国の未来学者アルビン・トフラーは、八〇年に『第三の波』という本を書き、いち早くIT革命後の世界を予測した。彼が、家庭内でコンピュータと通信を使うことによって実現するとした「在宅勤務」「ホームショッピング」「ホームバンキング」は、たしかに米国では拡大しつつある。しかし、日本をはじめ、台湾、韓国、香港など、東アジアの都市部では、若者や主婦が街を多数さまよって、携帯電話でメールを送りあつている。情報化が進めば、人々は家庭から移動しなくなるというトフラーの予測は、彼が対象にした米国では当たつたが、文化の異なる東アジアにはあてはまらなかった。

東アジアだけでなく、イスラム世界の情報化、ユタヤ社会のIT革命など、世界はそれぞれの社会に応じて、異なった情報化の様相を展開している。また、ニューヨークやシカゴのすぐ近くにさえ、インターネットもなく、ジャンボジェットにも乗らない、アーミッシュたちが平和に暮らしている。

電子メディアが多様な文化にどのように浸透し、その社会をどう変容させているのか。そして人類にどのような新たな世界をもたらすのか。インターネットでの情報収集とともに、地球を実際に旅することによって解読していくのが、ぼくの「情報人類学」だ。



### 奥野 卓司

(おくのたくし)

関西学院大学社会学部教授

1950年生まれ。

京都工芸繊維大学大学院を修了し、米国イリノイ大学人類学部客員準教授、甲南大学教授を経て、97年から現職。

著書に「第三の社会—インターネットによる家庭・産業・民族の変容」「パソコン少年のコスモロジー」などがある。